

## 氷筍集

五月号 2026

川幅を我がものとして残る鴨	有岡 萃生
うららかや石器作りの音はずみ	齋藤 亜矢
新入の別火坊入り馬酔木咲く	栗本 徳子
亀鳴くや思ひがけずも枝高き	加藤 剛
鬼の面へおかめの面へ豆を打ち	福江ちえり
綿布団の重さ昭和の懐かしき	植田 清子
練習帳にえんぴつ匂ふ春隣	伊東 弥生
脈々となぐ涅槃図涅槃講	田辺美千代
生き下手も九十年や春一番	友永基美子
待雪草咲きぬと告ぐる枕もと	福 のり子
大小の赤い手袋干しにけり	宮坂 美緒
春待ちの小ぶりの薪を焼べにけり	矢野 裕俊
どこに居ても蒲団被ればわが平和	大石 高典
太い兎瘦せ兎あり雪兎	寺川 貴也
極北の湖面に走る御神渡り	宮坂 千種
一筆の線を辿りて良寛忌	昌山瑠美子
だんだんとふ出雲言葉や蜆汁	中川 さち
虎落笛あすすることを決めかねて	加藤 広文

臘梅や吊灯笼の影長し	田中	白秋
砂紋引く熊手の先や冬日射し	細見	昌代
バリカンのやや遠慮がち冴返る	佐藤	慎一
雪解や山の記憶を解き放つ	米倉	大司
寄席囃子耳に残るよ春の宵	桑原	智美
大試験なれどひとりの追試験	富沢	壽勇
猫の仔のこゑに親猫探す子ら	秋山	陽子
篠笛の高級音色や寒の明	石田	信之
泣き顔を撮りつあやしつ雪遊び	住田	祥子
うららかや尻尾を立てて歩く猫	山田	ミチ子
冬終る花壇の覆ひまだ残し	伊藤	惠
涅槃会の花供曾作る弟子の腕	稲垣	妙順
初午の列参道の雨はげし	鳥居	裕子
料峭や母が寂しと夢の中	山本	京子
尾白鷺の餌奪ひ合ふ目のあたり	松村	滋子
慈姑掘る泥の重さをそつと掘る	杉浦	康子
重なりし梅見の誘ひ昨日今日	和田	小百合
正門より大学眺め受験生	大村	誠
御岳のみそぎどころの滝氷柱	杉本	伸一

氷筍集

四月号 2026

梟の鳴き止み闇の膨らみぬ	福のり子
仙人の岩屋に積る木の葉か	齋藤 亜矢
白朮火を小さく回し小さな背	谷口 文子
ひと雨に色深々と敷松葉	朝田 玲子
出口無き話マフラ―巻き直し	鈴木 大輔
冬ぬくし京の七味の匙加減	津嘉山 典
寺町の鐘の響きや晦日蕎麦	田中 白秋
火達磨を蹴りてどんどに戻したり	柳堀 悦子
佳き島やされど富士なき初景色	片岡 和子
年移り行く鐘の音のひとつつつ	片山 旭星
霜の夜や遅延のバスを待つベンチ	碓氷 芳雄
春隣オープンカーは二人乗	石原ゆき子
車窓より東寺すつくと春近し	小堀 恭子
結び目に父の癖あり餅届く	清水 淑江
誰がための戦争記憶氷面鏡	富沢 壽勇
ゆりかもめ呼べば応へる馴染なり	友永基美子
初釜の忘れ物なり茶の扇子	石上 敦子
昼月へ正月の凧のぐんぐんと	宮坂 美緒

忘年会一番乗りが隅に待つ	有岡 萃生
年新た常より深く頭下げ	寺川 貴也
補聴器を外し礼する明の春	加藤 広文
寒行の声らうらうと朝を押す	瀬川るみ子
天気欄まづ埋めてゆく初日記	加藤 剛
ラテン語の活用に吾の息白し	二宮 悠太
初雪の朝や祖谷より煙たつ	川竹 美樹
鍋焼や煮え立つ音の南部鉄	田中 勝
初午に賑はふ街の救急車	城戸崎雅崇
看板の文字に魅せられ買初に	斎藤よし子
波止場より遠富士望む初仕事	石田 信之
剥製の毛皮の硬さ雪の宿	住田 祥子
餅搗や杵を持ちたき子は列に	望月 有子
実盛の見得切る息や初芝居	山崎こうじ
ペタル軽き金曜日なり冬の川	桑原 智美
仏光寺通賑はし春星忌	林 剛
年酒とてかねて望みの酒を買ふ	山中伊蘭子
だんまりの台詞なりけり初芝居	土居 郁雄
願ひ事ひとつに絞る初詣	米倉 大司

氷筍集

二月号 2026

草は名を手放すやうに枯野原	朝田 玲子
冬うらら石の重みを手のひらに	齋藤 亜矢
寒き夜の母の手ぎゆつと握りけり	加藤 剛
警蹕の声低き闇おん祭	栗本 徳子
役席の嚏に午後の始まりぬ	有岡 萃生
凍滝の無音の闇に身を置きぬ	福 のり子
篝火を頼りに参るおん祭	谷口 文子
年用意何をせむとてせかさるる	小堀 恭子
朔日の社に朝の焚火の香	森 壹風
手伝ひにはなまるもらふ冬休	大畑 照子
咳続き人の恋しき夜の続く	友永基美子
猪の毛皮晒してありぬ山の川	丹羽 康夫
迷ひなく幼十の指が毛糸編む	宮坂 美緒
子を待つに窓の夜雨やクリスマス	鈴木 大輔
教はりし名を反芻す冬星座	鳥居 裕子
ここいらが仕舞ひどきとも吊柿	加藤 広文
神馬仰け反る凍空の奥秩父	柳堀 悦子
煙遁の術と逃げたる落葉焚	矢野 裕俊

くつさめの主の知れたり山の畑	小堀 尚美
凧に転がりやまぬものは何	寺川 貴也
凍つる水に日ごと晒すも楮かな	瀬崎るみ子
手に痛み凧の力や空青き	碓氷 芳雄
年の瀬の眺むるのみの着物かな	伊東 弥生
顔見世や舞妓の揃ふ棧敷席	平井 彰子
賀状書く天国宛も出したくて	城戸崎雅崇
落葉舞ふ舞つて重なり土を産む	森 裕子
さりながら打つべきかとも冬の蚊よ	古閑 裕海
比叡より下り来て祇園かぶら蒸	山崎こうじ
薪割の甘き匂ひや十二月	中村 淳子
秋高しパプロピカソの赤が好き	井上 良子
頓服の効きて微睡む時雨かな	佐藤 慎一
また解きまた糸編む妻の余暇	林 剛
松明の火柱残しおん祭	細見 昌代
月冴ゆる汽笛遠くへ消えゆけり	杉浦 康子
湯気立てて遠くの友を迎へけり	清水 勝徳
冬紅葉断層に沿ひ吉野川	大村 誠
ひととせは長く短し冬の月	玉元 庄弘

氷筍集

一月号 2026

しぐるるや傘をささぬといふ若さ	有岡 萃生
疑問符のごとく樹上に川鶉かな	齋藤 亜矢
海は時化に烏賊を干しつつ烏賊を釣る	大石 高典
猛禽の尾羽の切れや冬の空	朝田 玲子
男らの昼餉短し石露の花	鈴木 大輔
酒に合ふ煮付濃いめの金目鯛	田中 勝
秋の夜やカセットに聴く反戦歌	片山 旭星
波音に月齢四日の冬の空	柳堀 悦子
消火器の赤くつきりと今朝の冬	小堀 尚美
色変へぬ松や故郷の変りゆく	立石 律子
小走りの適はぬ齡初時雨	森 幸子
長き夜のノートの余白あり余る	加藤 剛
ひとしきり両手を添ふる温め鮓	鳥居 裕子
浅酌も低吟もせず月祭る	加藤 広文
連山はただ景のなか初時雨	瀬崎るみ子
小春日や背伸びの影ものびてをり	福 のり子
話したきこと抱き行く冬銀河	宮坂 美緒
蔭さへも澄み渡りける夜半の月	寺川 貴也

霜月や灯り頼りの細き道	米倉 大司
秋の暮ガラス窓より市章山	大村 誠
原生林揺さぶるやうに冬の雨	高松 房子
秋曇り火星は偏東風の吹く	清水 淑江
冬銀河ひとり時間の露天風呂	平井 彰子
注射また骨のためぞと冬に入る	加藤 節江
黄葉の櫂出入りの鳥の群	城戸崎雅崇
三筋町に茂吉の気配秋うらら	斎藤よし子
「忘れ傘」そこと見上ぐる秋の雲	秋山 陽子
経蔵の神将褪せて秋深し	石上 敦子
ほの白く鳶鳴く雨の夕紅葉	坂 利美
冬晴や今日の私は二重丸	大畑 照子
越前蟹けふ解禁といふ活気	中村 淳子
冬枯の道や歌劇の熱気抱き	大辻 都
男手のありがたみ知る冬支度	大野千鶴子
やがて輪袈裟濡らすほどなり秋時雨	田中 白秋
履きし綿靴下寒し今朝の床	清水 勝徳
霧の帯抜け山嶺の迫りけり	矢野 裕俊
普賢岳の噴火落ち着き草紅葉	杉本 伸一

氷筍集

一月号 2026

枝揺れてはなれ猿をり鰭雲	齋藤 亜矢
残菊のなほ花を待つ夕間暮	谷口 文子
爽やかや窓開けて鳥すぐそこに	加藤 剛
秋時雨にぶき音してホツチキス	小堀 尚美
うんとしか言はぬ子どもに青蜜柑	有岡 萃生
鯖鮪の予約始まり秋祭	石原ゆき子
新涼や神事の馬の眼澄み	植田 清子
秋蝶やあるじ戻らぬ能登の家	佐藤 慎一
火の絶えて久しき窯や菊飾る	高松 房子
耕畝忌や焼酎の湯気温としと	田中 白秋
猪檻の前にぴたりと猪の跡	田辺美千代
蛭草抜かずにおけばいとほしく	友永基美子
コルシカの樹間広めや栗拾ふ	丹羽 康夫
長き夜や勤めに追はれるし夢も	福地 義雄
茅葺の屋根を従へ蕎麦の花	森 壹風
秋の蜘蛛定位置にをり二十二度	福田 将矢
一時間さて本題へ今年酒	昌山瑠美子
部活動のおにぎり三つ栗ご飯	寺川 貴也

直面の俯きてゐる夜寒かな	鈴木	大輔
ともしびを絞りてよりの夜長かな	朝田	玲子
古伊万里の青のうすうす柿膾	瀬崎	るみ子
阿弗利加はベルトと呼ぶよたちの魚	大石	高典
秋風に笙むの余韻の消えゆけり	福	のり子
陋屋のしばし華やぐ柿紅葉	石上	敦子
吾がピアノ弾き継ぐ人へ秋うらら	宮坂	美緒
秋高し色鉛筆の青がなく	加藤	広文
鳥来るを待つ間も柿の熟るる頃	米倉	大司
病室にて波郷を読みし秋の宵	石田	信之
熱風邪に体温計は母の額	井本	陽子
新月や溪谷に星降り積もる	望月	有子
午後二時の帰宅なればと柿挽ぎに	坂	利美
筆箱にきのふ作りし木の実独楽	大畑	照子
爽やかや庭広くして庭師去る	中村	淳子
牛や馬に時代祭の今があり	相原	弘子
秋刀魚焼く煙のなかに猫がゐる	小川	妙子
バスの便減らず安堵の秋の空	大村	誠
十六夜の雲なく庭の夜香木	玉元	庄弘